

Ⅷ. 高齢学習者への対応

A. 高齢受講者への配慮

遠隔課程受講者の半数は高齢者ですが、高齢になってからの学習は、若い頃とは様相を全く異にします。若い世代を対象とした日本語指導のスタイルをそのまま高齢者には適用できませんし、指導方法だけではなく、学習の概念・とらえ方を講師の側が変えていかねばならない部分があります。

① 発音矯正について

外国語の発音を完全習得することは、母語の影響もあり、若い人でも難しいことですが、高齢者の場合、加齢に伴う身体能力や学習効率の低下、記憶力の衰えなどで、努力では補いきれないところが大きくなってきます。特に、学習適性の高い方の場合、学習場面での失敗経験が少なく、発音矯正がやる気やプライドを傷つける場合もあるかもしれません。「自尊感情」を傷つけ、学習意欲自体を失わせる可能性もあります。学習の継続を阻害することにもつながりかねませんので、支援する側も吸収力や柔軟性の高い若い世代に対する場合とは状況が違うことを認識し、高齢受講者の能力に応じた対応をお願いします。

② 表記の正確さについて

添削されて返ってきた課題が真っ赤だと受講者の方もがっかりされてしまうかと思います。しかし、その朱字の中にはたくさんの単なる表記ミスが含まれています。読み仮名表記の習得が困難なのは特に高齢者に顕著ですが、それは中日の音韻体系の違いから高齢学習者が日本語の音を正確に聞き取れるようになることはまずないからです。そこで、自分の耳で聞き取ったままに表記すると、清濁や長・直・撥・促音の別も不正確な表記になってしまいます。しかし、実は多くのコースで表記ミスは重大な問題ではありません。表記ミスはこれから入試を受ける人には減点の対象になりかねませんが、日本語の会話力が目的で受講されている方にとっては、日常生活でその語彙が聞き取れて発話できるようになれば目標達成で、厳密な正確さを追求する必要はないからです。添削時は一応直しを入れてお返ししていますが、音読してみて日本語としてコミュニケーションに支障のない範囲でしたら、気にしなくてよい旨を伝えていただければ結構です。このことをぜひ講師・受講者の方共々念頭に置いて活動を進めていただきたいと思います。(若い人でも思春期以降に来日した学習者では正確に日本語の音韻を聞き取ることは困難ですが、入試などを受ける場合は正確な表記を覚える必要が出てきます。)

同様に、漢字の字体についても、中国の簡体字が日本の字体と大きく異なるものについては日本の字体を覚えていただかないと筆談もままなりません(例:「機」と「机」)、見て誤解がない範囲であれば厳密に正確な字体でなくてもよいのです。特に、日本でも戦前は中国と同じ字体を使っていた字で、戦後日本の方が字体を簡略化させたものなど(例:「冊」と「册」)は中国字のままで全く問題ないでしょう。

③ 「場」ニーズの尊重

特別なケースですが、引きこもりがちな高齢者の中で、スクーリングだけが唯一の社交と学習の場である

ような方の場合、コースが本人のレベルに合っていないくても、とにかくスクーリングに来てもらうことを優先すべきケースがあります。このような方の場合、コースの決定や変更に際してはセンターとも相談の上、慎重に運んでいただければと思います。スクーリングではなく、地域のボランティア主宰の日本語教室参加の途を探る可能性もあります。

「入門日本語文型文法」コースを受講しているDさん（58歳、一世）は、中国語の識字にも日本語の会話力にも平仮名の読み書きにも困難があり、「入門日本語文型文法」コースでも無理ではないかと思われました。しかし、講師の方からご本人が大変熱心で友人と会えるスクーリングの場も楽しみにしているとのことなので、このコースで何とか続けさせたいとご連絡いただきました。また、同じ会場で「近隣交際会話」コースのスクーリングを受講中のご友人からも、Dさんには少し難しいコースだが二人で一緒に勉強したいとの希望があり、「近隣交際会話」コースも話題を楽しみ、場に参加できるコースということで受講することになり、まずは平仮名の学習からということになりました。この場合、最優先されるべき事柄が「場に参加すること」であったわけです。

④ 高齢者の学習について

高齢受講者は、「すぐ忘れる」「覚えられない」と連発したり、学習項目がなかなか定着しなかったり、学習以外の話や相談になってしまったりすることなどがあります。そのようなとき、スクーリング講師としてどのように対応すればよいのでしょうか。

例えば、「すぐ忘れる」「覚えられない」と連発する受講者でしたら、なぜ毎回訴えるのか、考えてみる必要があります。このケースでしたら、以下のようなことが考えられるでしょう。

- ・受講者は覚えられないことを講師にわかってほしいと思っているのかもしれない
- ・受講者は忘れること、覚えられないことにストレスや引け目を感じているのかもしれない
- ・受講者は教えてくれる講師に申し訳なく思っよう言っているのかもしれない
- ・受講者は学習したことを忘れてしまい、「学習が無駄ではないか」と感じているのかもしれない
- ・学習に限界や苦しさ、虚しさを感じているのかもしれない

「すぐ忘れる」「覚えられない」と連発することを上記のように解釈すると、以下のような対処例が考えられます。（もちろん、実際には、個々の受講者の個性や生活の背景、能力等を含め総体で判断していただければと思います。）

- ① 受講者の訴えを聞いて、「高齢になるとなかなか覚えられない」ことを、講師が理解していることを示す
- ② 「繰り返し」が高齢の人にとって学習法であることを伝える
- ③ いろいろな「繰り返し」学習法（書いたり、CDを聞いたり、声に出したり等）を紹介する
- ④ 「楽しく続けよう」と伝え、「1-2回では当たり前」、繰り返しが肝心なこと、それにはいくらでも付き合うこと、脳の健康維持ぐらいの気持ちでも十分なことを伝え、励ます

高齢受講者は、受講者の学習条件、能力、学習目的、生活環境、生活歴から、学習に制限や限界が生じることも多いので、受講者の発することばや態度等から、相手の状況を想像することが大切です。一般的な

日本語講師の使命は「日本語を習得させる」ということだと思いますが、高齢者を対象とする場合は、「日本語の習得」を第一義とせず、「生活や人生を充実させるための日本語学習」と捉え直していただいて構いません。スクーリングを進める中で、個々の高齢受講者に合った日本語学習の場を、受講者と共に作り上げていっていただきたいと思います。

以下に、高齢受講者を指導する際のスクーリング講師としての心構えをまとめておきます。

●高齢受講者を指導する際のスクーリング講師としての心構え

1. 基本はゆっくりペース。受講者のペースに合わせて、気長に付き合う
2. 学習を「続ける」ということを大事にする
3. 肯定的評価を心がける
4. その人なりの学習技術が身につけられるよう粘り強く指導する
5. 受講者が主体的であることを大事にする
6. 心身の健康を支える学習にする
7. 人との関わりの中で学んでいけるようにする
8. 「帰国者」という特殊な背景事情について配慮する
9. 相手を変えようとしな

(※次ページに【資料】として「高齢受講者に多い事象と対処例」を収めました。次ページ以降もご参照ください。)

【資料】

◆高齢受講者に多い事象と対処例◆

高齢受講者に多い事象	対処例	高齢受講者指導のポイント
●「覚えられない・進まない」系●		
<p>A 「すぐ忘れる」「覚えられない」と連発する</p>	<p>①受講者の訴えを聞く 「高齢になるとなかなか覚えられない」ことを、講師が理解していることを示す。</p> <p>②「繰り返し」が高齢の人にとって学習法であることを伝える</p> <p>③いろいろな「繰り返し」学習法を紹介する 書いたり、CDを聞いたり、声に出したりと、いろいろな「繰り返し」法を紹介する。</p> <p>④「楽しく続けよう」と伝える 「1-2回では当たり前」、繰り返しが肝心なこと、それにはいくらでも付き合うこと、脳の健康維持ぐらいの気持ちでも十分なことを伝え、励ます。</p>	<p>1. 基本はゆっくりペース</p> <p>2. 「繰り返し」という学習法が高齢者の学習法であることを、講師も受講者も認識する</p> <p>3. 不完全な部分があっても少しずつ先に進む</p>
<p>B 前回の復習をすることができない</p> <p>C 前にやったところが定着していないので、戻って学習することが多い</p> <p>D 定着しないので先へ進められず、同じところを繰り返して学習しなければいけない</p> <p>E 学習ペースがとて遅い</p>	<p>①毎回必ず最初に復習はしなくていい／復習はほどほどに 高齢になると前回やった部分を復習してもできるとは限らないので、徹底した復習はしなくてもいい。ある程度の復習は必要だが、復習のポイントを絞ったり、その日の学習に必要な部分のみを復習したりする。高齢受講者には既習項目が定着していないことに引け目を感じさせないようにし、できたところを評価するようにする。</p> <p>②行きつ戻りつしながら、進める 完全に戻ってしまわずに、ちょっと戻る。その日に学習する範囲で、以前に学習した項目にひっかかった場合は、戻って確認、練習や復習のポイントを示す。そして、また、その日の範囲に帰って学習を進める。</p> <p>③覚える箇所を絞る</p> <p>④完全習得はできていなくても次に進む</p> <p>⑤学習活動のステップを細かくし、1回1回のスクーリングを完結させる形で行う 細かい部分は定着しなくてもいい。先々での復習、コース自体を再履修するなど、繰り返すことを視野に入れて、ある程度で進む。</p> <p>⑥受講者の実際の学習ペースを見極め、受講者と確認の上、計画を修正する。まずはゆとりを持って、無理な計画は立てない いつも受講者を中心に置き、ものごとが判断され回っていくように心がける。同時に受講者が講師に遠慮しないよう、ゆっくりでもいいことを受講者に伝える。</p>	<p>4. 受講者各人の学習ペースを見つけ、それに合わせる</p> <p>5. 「覚えられない自分」を恥じないように否定的な評価になりすぎないように配慮する</p>
●「主体的に学習に取り組まない」系●		
<p>A スクーリングまでに勉強してくる約束の範囲を勉強してこない</p>	<p>①受講者に約束通り自学自習できなかった事情を聞く 忙しいのか、わからないのか、やる気が出ないのか、心配事があるのか等々。スクーリング講師にできないことを説明できる機会があることも精神衛生上重要。(自身の病気や配偶者の介護など高齢受講者の心配事は非常に重いことも多い。)</p>	<p>1. 自学自習を妨げる要因(物理的なものか、精神的なものか、肉体的なものか、学習技能的なものかなど)を探る</p>

<p>B 自学自習をしてこないから進まない</p>	<p>②事情が一時的なものなら計画をずらして、ペースは変えないで進む ③事情が長期に影響しそうな場合、今後の学習方針（目標やペース、学習量など）について話し合う ④特に事情がないように見受けられる場合、学習ニーズや、受講者の日本語レベルと学習コースのレベルが合っているか、自学自習力などの確認を行う ⑤（自学自習の技術がない場合は）自学自習の方法（教材の使い方や問題の解き方、覚え方など）を解説しつつ、スクーリングの時間に実際に自習を体験してもらう ⑥次回までに勉強する部分を具体的に提示し、自宅でやってくるように促す</p>	<p>2. 自学自習を妨げる要因を取り除くための解決策を一緒に探す 3. 自習が苦手な高齢受講者には多くは求めず、受講者と一緒に1つできる自習法を見つけていくようにする</p>
<p>C 学習内容について「何でもいい」とか「先生が決めて」と言う</p>	<p>①そう言われてすぐに講師の方で決めてしまわないで、受講者自身が自分の学習内容や練習方法について考える時間を作る ②助言をしながら、徐々に学習について受講者自身が選択したり、決めたりすることに関わってもらうよう促す。自分の学習を作る機会を与えることで、主体性や自己肯定感、自尊心を取り戻すきっかけにする</p>	<p>4. 高齢受講者が主体的に学習に関わっていきけるような機会を作る</p>

<p>高齢受講者に多い事象</p>	<p>対処例</p>	<p>高齢受講者指導のポイント</p>
-------------------	------------	---------------------

●「加齢にともなう身体能力の低下」系●

<p>A 2時間集中できない</p>	<p>①休憩や息抜きの時間（おしゃべり等）を設ける 学習活動にメリハリをつけるようにする。 ②2時間きっちりやらなくてもいい その日の受講者の様子を見て、加減する。 ③機械的な練習は控えめにする</p>	<p>1. 体調を最優先にする 2. 受講者のスピードや集中力に合わせた時間の使い方をする</p>
<p>B 体調が悪いことが多く、勉強にならない</p>	<p>①辛そうな時は勉強をしないで、様子を聞いたり励ましたりする 但し、勉強を健康維持の手段と捉えていたり、勉強が辛い生活の支え・楽しみになっていたりすることもある。多少勉強らしいことをしてあとは休み、精神的に充足してもらう。また、時間いっぱいやらないで、その日は早めに終わりにする。</p>	<p>3. 学習が健康を支えることにも留意し、健康維持のための学習を心がける</p>
<p>C 体調がよくなさそうなのに、ものすごく努力をする</p>	<p>②再開目標を相談して、しばらくスクーリングは休むこと、または遠隔課程を一旦退学することを勧める 受講者の意志を尊重しつつも、あまりにひどそうな場合にはスクーリングを休むことや、遠隔学習課程自体の退学を勧め、少しよくなってからの再開・再履修を勧める。</p>	
<p>D 以前より日本語での発話が大幅に減っている</p>	<p>①以前のような発話量や正確さ、流暢さ等は求めない 達成目標を下げて、クリアとする（目標達成とする）。体調に見合った目標を立てるようにする。 ②学習活動を聞き取り・理解を中心にする</p>	
<p>E 以前より日本語力が落ちている</p>	<p>③忘れてしまったものを思い出すことに重点をおいた練習をする 新しく身につけるといより、現状の維持や思い出しに重点を置いた練習にして、身体に負担をかけないようにする。 ④学習を続けていること自体を評価する 学習活動の成果は問わない。受講者の継続努力自体・学習意欲自体を評価するようにする。</p>	

高齢受講者に多い事象	対処例	高齢受講者指導のポイント
●「無駄話」系●		
<p>A 学習以外の話 (病気の話、帰国当初の話や仕事の苦労話などの昔話、家族や趣味などの話)や相談になってしまうことが多い。</p> <p>B 来ても、愚痴や恨み言を言ったり、泣いたりばかりしている</p>	<p>①受講者の話を聞く 本物のコミュニケーションを求めていると受け止め、話を聞くことを優先する。なるべく、日本語を使ったコミュニケーションの場になるようにする。スクーリングを続けていく中で、同じ話を繰り返しても、何回でも付き合う。</p> <p>②本来の学習活動の時間もいづらか確保し、学習の動機・ペース等を維持する</p> <p>③毎回、何分か自由会話の時間を設けるようにして、活動内容にメリハリをつける</p> <p>④問題がある時には、できる範囲で問題解決に協力する 何か問題がある時にはそれが気になって勉強が手に付かない場合が多い。事情を聞き、精神の安定に努める。学習環境を整えてあげるという意味でも受講者の心の安定を優先する。相談内容によっては、対処方法・適切な相談先を紹介する。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 家人以外とのコミュニケーションの欲求に応える 2. 受講者にとってのその時の最優先事項に、スクーリング講師も耳を傾け、できる範囲で相談に乗る 3. スクーリング講師は受講者の母語・母文化に対する許容度を高く保つ
<p>C 受講者同士、中国語で話をすることが多い</p>	<p>①多少の私語は認め、なるべく日本語で講師もそこへ関わっていくようにする 実際には学習内容に関わる話、また学習内容から派生した話をしていることが多い。こういうおしゃべりは学習したことへの理解を深めるための認知的な作業であり、学習効果も期待できる。</p>	
●「プライド」系●		
<p>A 知識を得ることで完結し、実際に役立つような実践的な練習を望まず、拒否反応を示す</p>	<p>①学習の目的等について話し合う コースの目的について伝え、生活に役立つ練習方法の効果を説明する。同時に受講者自身の受講目的を確認し、スクーリングでの学習について擦り合わせを行う。</p> <p>②受講者のこだわりが強い場合は、受講者の目標・学習方法を尊重し、受講者にとって精神衛生によい形で進める 個々人の学習スタイルは、その人らしさや個人のプライドと関わる部分でもあるので、一方的に否定してしまわないように留意する。また、その高齢受講者の「変えられなさ」に配慮して、学習活動を考える。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 老化による個人的・社会的なゆらぎ・不安定さを理解する 2. 高齢受講者の自尊心(プライド)を傷つけないように気をつける
<p>B 失敗を気にして会話練習をしない</p>	<p>①過剰に失敗を気にし、不安を示す受講者には、発話は無理強いない</p> <p>②他の受講者と異なるタスクを与え、他者と比較する機会をなるべく少なくする</p> <p>③個々のよいところを(高齢者の場合、能力や理解力だけでなく、努力や学習意欲なども)褒める スクーリングが試される場ではないことを体験的にわかってもらえるようにする。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 3. 交流の時間を確保し、講師と受講者、また、受講者同士が信頼関係を作っているよう心がける
<p>C ちょっとした注意やアドバイスが受講者には非難に聞こえてしまう</p>	<p>講師のこぼれに過敏に反応したように見受けられた場合(急激に落ち込んだり、涙ぐんだり、いろいろ説明・言い訳を始めた場合)には、</p> <p>①まずは話を十分に聞いたり、肯定的な励ましをしたりして、受講者の気持ちが落ち着くのを最優先にする</p>	

高齢化によって自信・自己評価が低下したり、自尊心が揺らいだりすることは誰にでも起こるが、それを受け入れて開き直れるまでには、一時的に他の人からのことばに過敏に反応してしまう人もいる。今後は、そのような状態であることに留意して対応する。

なお、注意やアドバイスをする場合は、**予防策として、**

②現状でできていることやいい部分とセットで受講者に伝え、最後は必ず受講者を褒めることばで締めくくる

③現状に対する注意・アドバイスとともに、その注意・アドバイスを実行した場合のよりよい未来像・イメージを示しながら話をするようにし、講師の側が意識的に受講者の気持ちを肯定的な方へ向けさせるようにする

★受講者との信頼関係も大きく影響するので、日頃からその基盤作りに努めることも肝要。

D講師より、スクーリング仲間のアドバイスをよく聞く

①スクーリング仲間との交流や情報交換の時間を設けるようにする

講師の側が「先生からだめ出しされる（上から下への）学習」から、「仲間同士の横のつながりによる（＝対等な）学習」になっていると捉える。受講者による選択・決定、学習への主体的参加へと関わり方を変えてもらえるチャンスと考え、講師の側が受講者同士の助言を引き出すよう試みる。